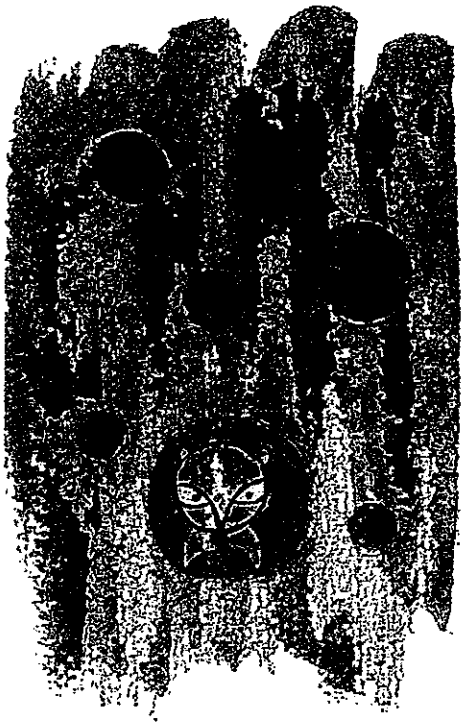
とじ豆のチロリン（貴志）

貴志の里の山谷口に、豆板のように平らな岩がそそり立った高いがけがあった。村人たちはそのあたりを「とじ豆」とよんでおった。

その中ほどに穴が開いていて、「とじ豆のおなつ」というメスの狸が住みついていた。近くの坂に住む「向井坂のやっかんころがし」とは夫婦だったそうな。



とじ豆のおなつは、やっかんころがしと連れだって村へ出かけていっては、ニワトリをとったり、畑の豆をとったりして村人をこまらせていた。

ある秋のこと。とじ豆のおなつは川のほとりにある小さなわらぶき屋根の家のそばまでやってきた。そこには、屋根をこすほどのりっぱな柿の木があり、大きくて赤い甘そうな実をたわわにつけていた。

そこへ男の子が二人やってきた。おなつはかくれて様子を見ることにした。

「わしは柿の木にのぼるで、おまえは下で見張っておれよ。もし、人が通りかかったら合図をしてくれな。」

「わかった。で、合図は？」

「チロリン、チロリン。」

「わかった。チロリン、チロリンやな。」

男の子はするすると木に登り、柿をもぎとりはじめた。

人が来ると見張りの男の子が、

「チロリン、チロリン。」

と合図した。すると、すばやく降りてきて、二人は何事もなかったようにふるまった。

そんなことを何回か繰りかえしていた。

すると、また柿の木の下から

「チロリン、チロリン。」

と声がする。あわてて降りてみたが、誰も来ない。

見張りの子に
「おまえ、チロリンというたか？」
とたずねたが、
「わしは、何も言うてない。」
と言う。また、木に登るとすぐに、
「チロリン、チロリン。」
という声がする。
二人は考えた。どうやら、だまされてるような……。そうだ、とじ豆のおなつのいたずらにちがいない。
二人は相談して合図を変えることにした。
「こんどのチロリンはホンチロリンにしよう。」
「わかった。こんどのチロリンはホンチロリンというんだな。」
さすがのおなつも、これはまねできなかった。
それからのち、村人たちは「チロリン、チロリン」という声を耳にするようになった。どうやらおなつが言っているようだった。
そんなことで村人たちは、「とじ豆のおなつ」のことを「とじ豆のチロリン」と呼ぶことにしたそうな。
チロリン。